

基督教学研究

第 40 号

武藤一雄没後二五周年記念シンポジウム報告

武藤宗教学における「内在的超越」について……………片柳榮一 1

武藤一雄先生の「新しい宗教学」について……………森 哲郎 17

武藤宗教学とキルケゴールの位置づけ……………谷塚 巖 31

論文

武藤一雄の靈性思想……………金子晴勇 47

武藤一雄のアポカリユプテイク（黙示）に対する評価を再考する……………勝村弘也 71

Muto Kazuo's Theology of Religions……………Martin Repp 104 (1)

— An Introduction……………Martin Repp 104 (1)

林忠良氏の逝去を悼む……………片柳榮一 105

彙報

彙報

A. 二〇二〇年度キリスト教学専修講義題目

声名定道 教授

系共通講義

特殊講義

「キリスト教学講義 A・B」
「キリスト教思想と宗教哲学(8)——キリスト教思想と自然の問題、キリスト教思想と宗教哲学(9)——生命・科学・倫理」

演習

「日本・アジアのキリスト教」賀川豊彦(4)、北森嘉蔵」

演習(前期)

「キリスト教思想の基礎文献を読む」Paul Tillich, *Berliner Vorlesungen III* (1951-1958)

講読

「キリスト教思想基礎文献を読む・テイリッヒ『愛、力、正義』(前期)」、Paul Badham (ed.), *A John Hick Reader*. (後期)」

津田謙治 准教授

特殊講義

「初期キリスト教教理史 I/A、I/B」

演習

「教父学の古典的研究を読む I/A、I/B」

声名教授・津田准教授

演習

「キリスト教思想の諸問題」(大学院生の研究発表)

岩野祐介

特殊講義(後期)

「明治期日本キリスト者のキリスト教理解」

加藤喜之 講師

特殊講義(集中)

「初期近代キリスト教における意志の問題」

浅野淳博 講師

演習(前期)

「新約聖書原典研究：ローマ書簡(上) 2」

河崎 靖 講師(後期)

演習

「ボンヘッフアーに関するテキストをドイツ語で読む」

手島勲矢 講師

語学

「古典ヘブライ語初級・中級文法」

B. 二〇二〇年度論文題目 (二〇二〇年三月)

卒業論文

- 東 直輝 「A・H・マズローの宗教観」
 高木和音 「スコセッシ作品におけるユダとキリスト」
 藤守 麗 「ヨセフスにおける〈預言者〉の問題」
 益子愛莉 「母性と聖性——〈母の宗教〉をめぐる問題について」
 吉澤夏生 「人間の倫理的問題と、それを補填するものとしての宗教」

修士論文

- 加藤良輔 「H・リチャード・ニーバー『啓示の意味』における啓示・歴史概念」
 渋谷遊歩 「サリー・マクフェイグの隠喩神学」
 西村一輝 「W・パネンバルク『ドゥワンス・スコトゥスの予定説』における〈神の自由〉の問題」
 課程博士論文
 谷塚 巖 「キルケゴールのレトリック——キリスト教批判の実験的試み」

C. 二〇二〇年度学術大会

- 第二四回学術大会 武藤一雄没後二五周年記念シンポジウム
 二〇二〇年十一月二十八日(土)、一三時三〇分～一六時
 日本聖公会京都教区 教区センター一階会議室、+オンライン参加
 パネリスト
 片柳 榮一 「武藤宗教哲学とキルケゴールの位置づけ」
 森 哲郎 「武藤先生の〈新しい宗教哲学〉について——〈上昇〉の探究性と〈下降〉の表現性——」
 谷塚 巖 「武藤宗教哲学における〈内在的超越〉について」

編集後記

本号は、武藤一雄先生の没後二十五年を記念しての特別号となりました。そのために研究ノートは掲載されていません。現在ドイツ在住のマルティン・レップさんには、特別寄稿をお願いしました。レップさんは、十年以上に及ぶ京都在住の間に、NCC宗教研究所副所長、龍谷大学教授などを務められながら、武藤先生の論文のドイツ語訳などを通して、欧米の研究者に武藤先生の思想を紹介して来られました。

第一号目次

終末論の二類型	武藤一雄
キリスト論の視点	森田雄三郎
初期アウグステイヌスの人間学	金子晴勇
Lumen Christi	佐藤吉昭
ルター <small>の</small> „Ordketel“に関する一考察	早乙女禮子
ルターにおける信仰と礼典	竹原創一
バルト「ローマ人への手紙」における神認識	村山周治

第二号目次

オリゲネスの「キリスト教理解」	水垣 渉
ゲッセマネ	大島征二
神学における言葉の問題	竹原創一
アウグステイヌスにおけるキリストの人性について	小池三郎
ギリシャ語旧約聖書における <i>naqbeia</i> について	伊藤利行
エルンスト・トレルチにおける „Kompromiß“ の概念	安酸敏真

シェリングに於ける

「世界経験」について

ルターにおける「外」と

「内」についての一考察

第三号目次

キルケゴール研究の方法について	小川圭治
エイレナイオスと聖書	菊地栄三
テイリツヒの芸術神学について	田辺明子
絶対の相の下に	片柳榮一
ルターの律法理解	宮庄哲夫
聖書へブル語統辞論の	勝村弘也
テキスト言語学的考察	

第四号目次

ルターの解釈学は	今井 晋
「実存論的解釈」といえるか	佐藤吉昭
キプリアヌスの教会理解	塩谷 悟
ノビリの印度伝道	
テンブルックのヴェーバー解釈を	高野晃兆
めぐる論争	

フィロンとキリスト教

ルターの抵抗権思想における服従の問題

創世記テキストにおける語りの技法

早乙女禮子

勝村弘也

森 哲郎

伊藤利行

シェリングに於ける神話と世界

ヘクサプラ断片の残存率について

第五号目次

解釈学的教義学の構成について

内村鑑三と「身体の救い」

言語芸術作品としての旧約聖書物語語テキスト

エルンスト・トレルチにおける

「歴史の神学」の構想

教義学的思考における解釈学的循環の問題

第六号(武藤一雄名誉教授古稀記念

特別号)目次

掛川富康

安酸敏真

掛川富康

神学的宗教哲学について

武藤一雄

アレクサンドリアのフィロンにおける

能動と受動の問題

水垣 渉

奇跡物語へのマジジナリア

大島征二

アルバート・シュヴァイツァーの聖餐論へ

の新約聖書学的批判

田辺明子

ヨセフスのモーセ物語について

秦 剛平

エイレナイオスの人間理解

菊地栄三

キプリアヌスの『棄教者論』考察

佐藤吉昭

アウグスティヌスの時間論

片柳榮一

ルターにおける「アフエクトゥス」の問題

今井 晋

ルターとアウグスティヌス

金子晴勇

神学的構造主義の問題

森田雄三郎

M・ヴェーバー「古代ユダヤ教」と

パリアア民族の概念

高野晃兆

浄土系仏教とキリスト教の救済論の

一異に関する考察

原田博充

日本の伝統的宗教的心情とキリスト教

との関連について

名木田薫

ウィリアム・ケアリの伝道に対する貢献

塩谷 悟

神概念の転換

小川圭治

第七号目次

ルターと神学的決定論

金子晴勇

Inango Deとしての精神の自覚の

三一的構造

片柳榮一

脚下照願

武藤一雄

M・ヴェーバー「古代ユダヤ教」と

カスパリの批判(一九二二)

高野晃兆

パウル・テイリッヒと象徴の問題

芦名定道

第八号目次

キリスト教概念の成立(その二)

水垣 渉

アルベルト・シュヴァイツァーの

「イエス神秘主義」

笠井恵二

シェリング「自由論」再考(一)

ルターにおける職業観の問題

森 哲郎

ルターにおける職業観の問題

第九号目次

早乙女禮子

西田幾多郎とキリスト教

R・フルトマンにとっての

小川圭治

イエスの意義に関して

名木田薫

旧約物語テキストにおける

ヒンネー(見よ)の機能

シェリング「自由論」再考(二)

勝村弘也

P・テイリッヒの時間論

森 哲郎

キエルケゴールにおける

芦名定道

「自己の定義」について

山本忠義

第十号目次

ルターにおける「体験」の問題

——一つの覚悟——

今井 晋

シユタウピッツとルターの神秘思想

ルターとカールシュタット(二)

金子晴勇

ルターにおける試練について

宮庄哲夫

神学主義と宗教主義

竹原創一

オリゲネス「原理論」に於ける

悪の問題序論

武藤一雄

キエルケゴール「死に至る病」の

「キリスト教的理解」

久山道彦

「キリスト教的理解」

信岡茂浩

第十一号目次

創造と進化——創造における無——

森田雄三郎

ルターとカールシュタット(二)

神言表の可能性とその(言述的)

「合理化」の問題

ヘブライズムとギリシヤ語聖書

エラスムスの「敬虔」概念の倫理的基礎

畑 宏枝

キリスト教倫理の源泉

七十人訳翻訳史序説(二)

隠喩と神学的実在論

ニュッサのグレゴリオスの

「鏡における神認識」の存否

オリゲネスにおける神のエネルギー

松丸 太

第十三号目次

内村鑑三における「内と外」の論理

原島 正

名木田薫

秦 剛平

芦名定道

土井健司

第十二号目次

神探求の場の開示

片柳榮一

二つの歴史的社会的イエス研究について

大島征二

「思い煩う」(ルカ二・二二—三三)

について

田辺明子

レッシングの神学思想——序説——

安酸敏真

自由意志論争におけるエラスムスとルター

畑 宏枝

アントニオスの修道

竹田文彦

第十四号目次

キルケゴールにおける〈論理的問題〉

林 忠良

罪の自覚——その人間学的考察(二)

内村公義

モルトマンの歴史理解——希望の神学と

現代世界の問題

探求する聖霊——初期オリゲネスにおける

解釈的原理

ニュッサのグレゴリオスにおける「鏡」

久山道彦

の概念について

クリュノストモスの解釈学——神理解の

可能性と不可能性の問題を巡って

武藤慎一

伊藤邦幸氏の逝去を悼む

高野晃兆

第十五号目次

罪をおかすことによつて罪から救贖できる？

——ユダヤ教神秘主義の失敗からの

警告——

森田雄三郎

ブルトマンと聖書

アウグスティヌスの恩寵論

ニシビスのエフライムの解釈学

P・テイリッヒにおける「カイロス」と

認識の形而上学——歴史の相対主義

の克服を巡って——

「コヘレトの言葉」の構造と思想

——一人称表現の用法をめぐって——

金井由嗣

第十六号 (故武藤一雄名誉教授追悼号)

目次

- 神・愛・場所——ブーバーから武藤への
接近の一つの試み—— 水垣 渉
- アルバート・シュヴァイツァーの聖餐論に
おける問題設定 田辺明子
- 殉教者カルトゴ司教キプリアヌスの
古代殉教観の軌跡 佐藤吉昭
- 古代教会におけるキリスト教経済思想の形成
——トレルチ「社会学説」研究ノート——
高野晃兆
- 二つの恩恵——アウグステイヌス「誼實と
恩恵」十一—十二章 片柳榮一
- ルターのキリスト神秘主義 金子晴勇
- 言葉と経験——ルターとディオニシウスの
かわり—— 竹原創一
- 若きレッシングの宗教思想 安酸敏真
- キリスト教の自然理解について——序章——
今井 晋
- 神の愚かさと人間の賢さ 森田雄三郎
- キリスト教の終末論における将来的な
ものと現在のなもの 原田博充

「キリスト教と仏教」に関する若干の考察

名木田薫

モルトマンの聖書理解 笠井恵二

M・ブーバーとハシディズム 早乙女禮子

Wie wird man seiner Hingeburt gewiß?

—— Eine Untersuchung zum Reinen

Land Buddhismus der Heian und
Kamakura Zeit マルティン・レップ

第十七号目次

ルターの神観における神秘的なるもの

金子晴勇

ルターの詩篇解釈における語り手の問題

竹原創一

エラスムスにおける「反野蛮人論」と
ヒューマニズム 畑 宏枝

「ベルシヤの賢者」アフラハトの解釈学 武藤慎一

テイリッヒ「教義学」における歴史の問題 今井尚生

第十八号 (水垣渉名誉教授退官記念号)

目次

応報か、行為・帰趨連関か？ 勝村弘也

聖書における沈黙について 伊藤利行

生成の論理と存在の論理
—— 古代キリスト教思想の解釈への
一試論—— 土井健司

クリュノストモスにおける神の下降と
人間の上昇—— 解釈学的観点から——
武藤慎一

この世界への、この世界からの脱出
—— ハンナ・アーレントのアウグス
ティヌス解釈 片柳榮一

エラスムス「現世の軽蔑」に関する一考察
—— その執筆動機と思想—— 畑 宏枝

ルターの詩篇解釈における悔い改めと沈黙
—— 第四編五節の「悔い改めなさい」
(Ps 51)と「沈黙しなさい」(Ps 42)の
解釈をめぐる—— 竹原創一

レッシングにおける真理探求の問題 安酸敏真

キェルケゴールの「罪」理解——「死に至る病」

を手掛かりに 山本忠義

価値および意味と宗教の問題——トレルチ

およびテイリッヒの思想を手掛かりとして—— 今井尚生

現代キリスト教思想における

終末論の可能性 芦名定道

明治キリスト教と朝鮮人李樹廷 金 文吉

「Haitologia」als die wissenschaftliche

Konzeption Teisutaro Arigas - Zum

Problem der Interpretation von Ex. 3.

14ff. als theologisch-hermeneutischer

Methode für die Theologiegeschichte

掛川富康

オリゲネス「原理論」における本性と被造性

久山道彦

第十九号目次

キリスト教古代の女性殉教者再考(一)

佐藤吉昭

第一次ユダヤ戦争に見るフィロカイサル

秦 剛平

アフラハトにおける神の下降と人間の上昇

—— 解釈学的観点から—— 武藤慎一

ササン朝ペルシアにおけるキリスト教徒

迫害と「エデッサ殉教者伝集」 竹田文彦

「エレミヤの告白」における

呪いの言葉をめぐる 大石祐一

知恵の人格性と一人称表現——箴言八章

一二節「私は知恵」の理解—— 金井由嗣

ヒック宗教的多元論の科学的構造

小倉和一

第二十号目次

トレルチとカルヴィニズムの社会哲学

—— デモクラシーとの関連に 高野晃兆

注目して——

トレルチとセバステイアン・フランク

安酸敏眞

テイリッヒの生の次元論における一問題

—— 統一概念の周辺—— 今井尚生

シュライエルマッハーの「信仰論」における

罪理解 帆刈 猛

ひとり立つ人格と真の交わり

—— キェルケゴールの「単独者」の思想を 原田博充

媒介として——

真理の多形性——ドイツ文化プロテスタン

ティズムの今日的意義について——

フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ

表現主義とテイリッヒの視覚芸術論

川桐信彦

伝記的記述の客観性について

—— E・フッシュユ「K・バルトの生涯」を 小川圭治

めぐって——

森田雄三郎氏の逝去を悼む

高野晃兆

第二十一号目次

「緊張」について

—— キリスト教思想研究の方法に 水垣 渉

ついでの一つの省察——

K・バルト「教会教義学」における

「キリスト—信仰」について

—— 実存と救済史との一体性という 名木田薫

観点から——

罪の自覚——その人間学的構造(二)

内村公義
「宗教哲学の新しい可能性」について
——武藤一雄名譽教授の学問的立場を
めぐる断想(その一)—— 今井 晋

同一性から複数性へ——ジョン・ヒックの
キリスト論—— 小倉和一

反省と顕現——リクールの宗教言語論の
構造について—— 佐藤啓介

懐疑者の義認——前期テイリッヒの
義認理解—— 近藤 剛

偽ディオニシオス・アレオバギテース
——「神名論」第二章における
神の統一と区分—— 大月栄子

第二十二号目次

人間の内の恒久なるもの
——アウグスティヌスの
「神の似像」理解—— 片柳榮一

キリスト教における性的問題
内村鑑三における「神・人・自然」 笠井恵一

宗教的複数主義とバトナムの 原島 正

小倉和一
プラグマティックな実在論
神名再考——出エジプト記三章一四節の
統語論的考察—— 大石祐一

聖書、解釈、自己、行為——リクールの
聖書言語論の社会思想的射程—— 佐藤啓介

初期テイリッヒの思惟構造
——「二元論」「三元論」モデル—— 近藤 剛

テイリッヒにおける宗教社会主義の
神学的意義——テイリッヒ・ヒルシュ
論争をめぐって—— 岩城 聡

マルキオンにおける創造と悪
——テルトゥリアヌス「マルキオン反駁」
をテキストとして—— 津田謙治

第二十三号目次

キルケゴールにおける「Continuum」の問題
シュヴァイツァーとアイヒホルン 林 忠良

——聖餐をめぐって(一) 田辺明子

神学と宗教学——両者が困難を越えて

関係を結ぶための暫定的な覚悟——
クリストフ・シュウヴェーベル
リクールの贈与論
——倫理の源泉としての贈与の経綸—— 佐藤啓介

神秘主義と罪責意識のアンチノミー
——初期テイリッヒのシェリング解釈—— 近藤 剛

類似しない類似
——神への上昇の偽ディオニシオスの
方法—— 大月栄子

二つの「義の神」像——プロレマイオスと
マルキオンにおける解釈をめぐって—— 津田謙治

アレイオス主義における神論と
救済論についての一考察 大橋仁夫

理解のための思考
——ハンナ・アーレントの「精神の生活」
における「思考」の意義—— 今出敏彦

第二十四号目次

キリスト教思想と形而上学の問題 芦名定道

田村直臣の「児童中心のキリスト教」

帆刈 猛

四世紀イラクにおける地域文化としての

キリスト教——そのマイノリティー

としての自己意識—— 武藤慎一

初期テイリッヒ「組織神学」構想の意義

近藤 剛

神を映し出す鏡——偽ディオニシオス・

アレオパギテースにおける天上の

存在者の位置づけ—— 大月栄子

テルトゥリアヌスとマルキオン・カノー

ン——「異端者への抗弁」と「マルキオン反駁」

における異なる論点を巡って——

津田謙治

人間の生に仕えるものとしての精神の生

——ハンナ・アーレントの

「精神の生」の構想—— 今出敏彦

後期テイリッヒにおける歴史をめぐる問題

——問いの構造について—— 鬼頭葉子

内村鑑三の「近代批判」と再臨運動

——社会から個人へ、

そして再び社会へ—— 岩野祐介

第二十五号（水垣渉名誉教授古稀記念号）

目次

アウグステイヌスの「知ある無知 Ignorantia」

ホワイトヘッッドの形而上学とプロセス神学

旧約聖書での啓示体験（序論）

——日本の心情との関わり—— 名木田蕉

パツチュの聖餐研究における類比の問題

——ヘレニズム起源の類比について—— 田辺明子

オリゲネスにおける戦争倫理学

——古代キリスト教における

宗教的生の一断面—— 久山道彦

ニシビスのエフライムにおける神学的

アプローチ——シリア・キリスト教

の意味するもの—— 竹田文彦

クリュノストモスのエウドキア（神の喜び）

理解——影響作用史的聖書解釈の

試み—— 武藤慎一

詩篇解釈をめぐるルターとカルヴァン

—— 竹原創一

キエルケゴールの「自由の可能性」

——「永遠的なもの」を目指して——

トルレルチと「キリスト教学」の理念

罪の自覚

——その人間学的構造（三）

ありである哲学者の神

——マリオンとリクールの思索を

手がかりに—— 佐藤啓介

聖書の伝統とその周辺における「わたし」

と「自己」の問題 水垣 渉

第二十六号目次

ヨブ記解釈の諸問題——文芸作品として

のヨブ記—— 勝村弘也

ニュッサのグレゴリオスによる説教「施し」

アウグステイヌスの予定論

——セミペラギアニスムス論争に

関する試論—— 小池三郎

偽ディオニシオス・アレオパギテースに

—— 土井健司

おける神の隠れと闇 大月栄子
無からの創造——古代教父思想における
神の超越性—— 津田謙治
行為の源泉としての意志
——ハンナ・アーレントの行為概念

再考—— 今出敏彦

パウロ・テイリッヒの聖霊理解——霊の
普遍性・創造性について—— 鬼頭葉子
内村鑑三における信仰と愛との関連
——個人の信仰、隣人愛から

社会性へ—— 岩野祐介

パネンベルク「神学的観点における人間学」
(一九八三年)の中心課題 濱崎雅孝

第二十七号目次

自然神学の新たなフロンティア
——脳と心の問題領域—— 若名定道
著作「反復」の成立——キルケゴールの
〈反復〉の思想 序説—— 林 忠良
「緊張」について——キリスト教思想研究の
方法についての一つの省察——(承前)
水垣 涉

M・ブーバーにおけるハシデアイスムの
神秘主義と我—汝思想 堀川敏寛
「倫理学の根本問題」におけるトレルチの
思想体系 小柳敦史

第二十八号(片柳榮一名誉教授退任 記念号)目次

人格と人格を越えるもの
——西田哲学とキリスト教をめぐる
一考察—— 片柳榮一
パッチュの聖餐研究における類比の問題
——旧約聖書のユダヤ教的類比
について—— 田辺明子
古代教父思想における〈時間〉概念
——エイレナイオス「異端反駁」の議論を
中心として—— 津田謙治
ヨアンネス・クリュソストモスの神人共働論
儀礼におけるキリスト——偽ディオニュ
シオス・アレオバギテースにおける
キリストについての一考察—— 大月栄子
ルターのパトリックにおける〈情動〉について

竹原創一
初期シユライエルマッハーの〈教養〉概念
帆刈 猛
トレルチの「社会教説」と《社会学的
基本図式》
高野晃兆
近代キリスト教と政治思想
——序論的考察—— 若名定道
感情の芸術性と宗教性——ハイデガーの
情態性論を起点として—— 川桐信彦
アーレントのアウグスティヌス解釈
今出敏彦
はじめはいつも悪——リクールにおける
創造論の展開—— 佐藤啓介

第二十九号目次

前期アルトマンにおける神学と哲学について
大島征二
Th・マンとM・ルター——一つの試論の
ための予備的考察—— 掛川富康
アーレントの「全体主義の起源」再読
——「人間の条件」へ 今出敏彦
E・トレルチの思想展開における「本質」

概念の位置づけ 小柳敦史

アウグスティヌス「シンプリキアヌスへ」

における「相応しき呼びかけ」(vocatio congruens)と自由意志 須藤英幸

ジョン・ヒックの神義論 方俊植

II コリント五・三における読みの問題 田代英樹

第三十号目次

特集〈ハヤトロギア〉

有賀鐵太郎のハヤトロギアの構想、

特質及び問題点 水垣 渉

「遠くて近き神」——アウグスティヌスの

「在りて在る者」理解—— 片柳榮一

ルターとアリストテレス

——正義の理解をめぐる—— 竹原創一

有賀鐵太郎とカール・バルトにおける

出エジプト記三章一四節以下の理解

——神学的解釈学および契約史における

その位置—— 掛川富康

ティリッヒにおける時間と空間の問題

——存在論と歴史の關係—— 鬼頭葉子

共同体論の基礎としての〈宗教的アプリアー〉

小柳敦史

神秘主義の観点から見た宗教多元主義

——東アジアの文化的背景を中心に—— 方俊植

現代神学における神の現実存在の問題

——ブラウンとコルヴィツァーの

論争を中心に—— 上原 潔

シュヴァイツァーにおける世界観の

問題について 岩井謙太郎

今井 晋氏の逝去を悼む 宮庄哲夫

第三十一号目次

英語圏におけるヨセフスの近代語訳と

その受容史 秦 剛平

「と」の神学」再考——内村鑑三の

宗教思想を中心に—— 原島 正

特集〈ハヤトロギア(続)〉

ハヤトロギアの批判的継承に向けて

勝村弘也

二十世紀フランス哲学とハヤトロギア?

——神と存在の關係をめぐる

問いの変貌—— 佐藤啓介

アウグスティヌス「教師論」(De magistro)

における記号論 須藤英幸

シュヴァイツァーにおける倫理的神秘主義の

諸問題について 岩井謙太郎

由来としての信仰——初期ハイテッカーに

おける宗教的背景に関する一考察—— 上原 潔

賀川豊彦の思想における〈芸術としての悪〉

最高善とカントの人間観 ステイグ・リンドバーグ

夏目漱石とキリスト教 朴鍾順

佐藤吉昭氏の逝去を悼む 水垣 渉

第三十二号目次

西谷啓治の「宗教／哲学」

——「自己のもと」の究明—— 森 哲郎

ブルトマン再考——実存的「歴史性」の

概念の再検討—— 安酸敏眞

不安の概念——水垣理論の存在論的解釈へ

今井尚生

むけての試論——
マルティン・ハイデッガーとマルティン・

ルター——初期ハイデッガー哲学に

おけるルター神学の影響—— 上原 潔

シュヴァイツァーにおける生への畏敬の

倫理の構想—— 遺稿「生への畏敬の

世界観」をめぐって—— 岩井謙太郎

Ch・テイラーにおけるカトリシズムの

特徴とその妥当性 鬼頭葉子

ストア学派の論理学とアウグステイヌス

『問答法』における記号理論 須藤英幸

カント哲学における信仰の概念 南翔一朗

IIコリント五・六bを巡る問題 田代英樹

宗教の複数性をめぐる宗教論の諸問題

——カントウエル・スミスの議論を

中心に—— 方俊植

内村鑑三における「神の言辞」について

渡部和隆

小川圭治氏の逝去を悼む 水垣 渉

第三十三号 片柳榮一名誉教授

古稀記念号 目次

キリスト教の多様性からその全体性へ

——キリスト教学序説のためのノート——

水垣 渉

アガペーとエロース

——ニーグレン・波多野・テイリッヒ——

芦名定道

イザヤと第二イザヤをつなぐ概念と

その贖罪思想——フーバーの第二

イザヤ書分析を通して—— 堀川敏寛

《ユダヤ教の食事》という現象の、

より包括的な記述——パッチュの

聖餐研究において—— 田辺明子

第二の神としてのロゴス——殉教者

ユステイノスとプロレマイオスの

議論を中心に—— 津田謙治

アウグステイヌス『三位一体論』における

内的言葉 須藤英幸

魂に包まれる身体——ダマスコのヨアンネス

における「神の場」について——

大月栄子

アラム系文字伝播史におけるハラホト

出土シリア文字文書の意義 武藤慎一

レッシングのキリスト教

——伝記的考察—— 安酸敏真

E・トレルチ『社会教説』における

〈社会的〉の意味 高野晃兆

ドイツ・プロテスタントイイズムにおける

前衛と後衛 小柳敦史

内村鑑三における罪と赦しの問題

——とくに自死との関連から—— 岩野祐介

三・一以後の神認識——バネンベルクの

神論を手がかりとして—— 濱崎雅孝

死という悪に死者は抗議できるのか

——神義論の宗教哲学への基礎的考察——

佐藤啓介

特別寄稿

自然の秘義としての自由なる存在者

——シュヴァイツァーの博士論文

におけるカント解釈—— 片柳榮一

第三十四号目次

ルターの『主張』について——エラスムスと

の自由意志論争の背景—— 竹原創一

武藤一雄の神学的宗教哲学に於ける

パウロの「場所」—— 笠井恵二

自然法における摂理・理性・裁き

——アーレントの『悪の陳腐さ』を巡る

正義論の現実性（第一部）——

松山高吉と海老名弾正の神道理解に関する

比較分析—— 今出敏彦

キルケゴールの仮名テキストと

「倫理的なもの」—— 谷塚 巖

内村鑑三における贖罪論

——山上の垂訓とコリント前書と

ヨハネ第一書を中心に—— 渡部和隆

日本初期キリスト者における「上帝」の使用

——植村正久と内村鑑三を中心に—— 金香花

R・R・リューサーのキリスト論

——男性の救世主は女性を救えるのか——

張 旋

第三十五号目次

古代イスラエルにおける富の問題

——死海文書の知恵文書を中心に

考える—— 勝村弘也

日本宣教の先駆者C・M・ウイリアムズの

バックグラウンド——十八、十九世紀の

米国聖公会における神学的

ダイナミズム—— 岩城 聰

苦しみの叫び声は何を求めているのか

——神義論から宗教哲学へ—— 佐藤啓介

テイリツヒ「四一神論」の可能性

——歿後五十周年に臨んで—— 近藤 剛

魂を注ぎ出すこと

——アウグスティヌスによる

愛の聖書解釈学—— 須藤英幸

良心の観点からの生死という問題

ハンスリゲオルク・ガダマーの解釈学に

おける「理解の歴史性」について

——聖書解釈との関連から—— 岡田勇督

カント哲学における神学の問題と

道徳神学の位置づけ—— 南翔一郎

朝鮮語における神の訳語ハナニム

ヴァルター・フライターク「伝道の神学」に

おける教会論—— 南裕貴子

高橋五郎の神道理解——「神道新論」と

「諸教便覧」を中心に—— 洪伊杓

キルケゴールにおける「詩」の問題

——「可能性」との関連から—— 谷塚 巖

第三十六号目次

人であるかぎり人を愛する

——偽クレメンス文書『講話』における

フィランソロピア論—— 土井健司

西谷啓治とパウル・テイリツヒの歴史理解

——「空」と「カイロス」—— 鬼頭葉子

ガダマーとアルトマン

——解釈学的構造を軸にして—— 岡田勇督

カントの宗教哲学における倫理的公共体と

義務としての最高善の促進——宗教哲学

から社会哲学への移行とその問題——

南翔一朗

前期P・テイリッヒにおける

「突破」について

平出貴大

翻訳理論からの訳語論争考察——ナイダの

動的等価理論の場合——

金香花

R・R・リニューサーのフェミニスト神学に

おけるマリアをめぐる考察

張 旋

第三十七号目次

宗教改革を再考する——キリスト教人間学の

視点から——

金子晴勇

宗教改革四〇〇周年記念再考

小柳敦史

宗教改革四〇〇年と内村鑑三のルター受容

岩野祐介

アウグスティヌスにおける現世の恩恵

——ローマ書七章後半の解釈をめぐって——

渡邊蘭子

フロレンスキイにおける神と被造物の

関係性の問題——知識の視点から——

ブラジミロフ・イボウ

第三十八号目次

オリゲネスにおける神的場所概念の考察

——『祈祷』の議論を主軸として——

津田謙治

創造しない創造者——モルトマンの創造論と

レヴィナスの存在論——

濱崎雅孝

有賀鐵太郎没後四〇年記念シンポジウム報告

ハヤトロギアと《論理の中断》

——序説——

水垣 渉

父、有賀鐵太郎への想い

有賀誠一

遊びと聖書解釈

——ガダマーによるブルトマンへの

前期P・テイリッヒにおける形而上学の構造

——啓示の出来事とその語り——

岡田勇督

カントの宗教哲学における神義論の問題

平出貴大

ヴァルター・フライターク「伝道の神学」と

伝道活動——中国伝道を中心に——

南翔一朗

南裕貴子

第三十九号

前近代トルコ・キリスト教思想

——ハラホト出土シリア文字テュルク語

文書を中心として——

武藤慎一

文化的シオニスト、アハド・ハアムの

精神的中心

堀川敏寛

パウロにおける信仰と倫理の関係性

——シユヴァイツァーの生への畏敬の

倫理との連関を巡って——

岩井謙太郎

パネンベルクによるシユライアマハ―批判

岡田勇督

矢内原忠雄の日本的基督教における「国体」

論とその研究の現代的意義

山中健司

フロレンスキイの宗教思想における文化の

歴史的類型

ブラジミロフ・イヴォ

高野晃兆氏の逝去を悼む

水垣 渉

京都大学基督教学会規約

- 一、本会は京都大学基督教学会と称し、事務局を京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科キリスト教学研究室に置く。
- 二、本会は基督教学研究の進展を目的とする。
- 三、本会は前条の目的を達成するために以下の事業を行う。
 - (一) 研究集会、講演会などの開催
 - (二) 学会誌「基督教学研究」の発行
 - (三) 内外の研究機関及び研究者との相互交流
 - (四) その他の必要な事業
- 四、本会は基督教学の研究に従事する者、もしくは本会の趣旨に賛同する者をもって構成する。
 - (一) 一般会員
 - (二) 学生会員 大学院学生及びこれに準ずる者。
 - (三) 会友 本会の趣旨に賛同するもので、研究集会での発表の機会と学会誌の配布を受けることができる。会友希望者は、委員会の承認により会友となることができる。二年以上会友であった者で、会員になることを希望する者は、会員二名の推薦により委員会の議を経て、総会で承認を受けるものとする。
- 五、本会の経費は、会費、寄付金、その他の収入をもってこれ

に充てる。

会費として、会員は年五千円、会友は年三千円を納めるものとする。

六、本会の運営のために次の委員を置く。

(一) 代表者 (一名)

(二) 委員 (若干名)

(三) 監事 (一名)

七、本会は毎年総会を開き、会計及び一般報告を行い、必要事項を協議する。

八、本規約は運営委員会の発議に基づき、総会において変更することができる。

附則

本規約は一九九八年十二月施行、二〇〇八年七月改訂。

運営委員会

代表者…宮庄哲夫

委員…片柳榮一、勝村弘也、芦名定道、武藤慎一、

岩城 聰、岩野祐介、津田謙治

監事…笠井恵二

執筆 者

片柳 榮一	京都大学名誉教授
森 哲 郎	京都産業大学教授
谷 塚 巖	関西学院大学非常勤講師
金子 晴 勇	岡山大学名誉教授
勝村 弘 也	神戸松蔭女子学院大学名誉教授
Martin Repp	(編集後記を参照)

『基督教教学研究』投稿規定

- 一、寄稿者は本学会員にかぎる。
- 二、内容は未発表の学術論文であること。採否ならびに掲載の時期は、査読委員による査読の報告に基づき、編集委員会が決定する。
- 三、寄稿原稿は、論文については四〇〇字詰原稿用紙四〇〜五〇枚(註・図表などを含む)相当、研究については三〇枚相当とする。
- 四、寄稿原稿の執筆細目および査読審査規定については、別途、原稿執筆要項等の内規にて定めることとする。
- 五、寄稿原稿には、欧文タイトル、執筆者欧文氏名を付記すること。
- 六、原稿が採用された場合、執筆者には抜刷三〇部を贈呈する。

(本規定は二〇〇〇年十二月十六日から施行する)

第四十号編集実務委員会

宮 庄 哲 夫
片 柳 榮 一
勝 村 弘 也
芦 名 定 道
武 藤 慎 一
岩 城 聰
岩 野 祐 介
津 田 謙 治

二〇二二年三月二十一日印刷
二〇二二年三月三十一日発行

定価一五〇〇円

発行者

京都大学基督教学会
京都市左京区吉田本町
京都大学大学院文学研究科
キリスト教学研究室内

発行人

宮 庄 哲 夫

発売元

(株)一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10

印刷所

(株)アイワード

本誌の御註文は、最寄のキリスト教書店、
もしくは、右記、京都大学基督教学会（振
替〇一〇三〇一五―七二〇七）へ、定価一
五〇〇円（送料当方負担）を添えてお申込
みください。

『基督教学研究』バックナンバー公開に関しまして

本学会誌『基督教学研究』は、1978年に創刊して以来、古代から現代までの様々な分野におけるキリスト教学に関連する諸論考を毎年刊行して参りました。今後も紙媒体として順次、学会誌を刊行していく予定ですが、研究の成果を幅広くアクセスしやすくするために、バックナンバーについてはオンライン化を進めることが学会運営委員会で検討されています。

学会誌のオンライン化に関しては、京都大学学術情報リポジトリ「紅」でのオープンアクセスによる公開を検討しており、本会の予算を一部使用することによって、2021年度よりオンライン化の作業を進めたいと考えておりますが、インターネット上で公開するにあたり、これまで論考を寄稿して下さった著作権者の承諾が必要となります。しかしながら、『基督教学研究』創刊号以来の著作権者は多数にのぼり、連絡先が不明であったり、また様々な理由により連絡を取ることが困難であったりする状況が少なくありません。

このような状況を鑑み、運営委員会では、これまで『基督教学研究』にて論考を執筆された著作権者に対し、著作権委譲に関わる経緯と内容を本ホームページ上で公表し、著作権を京都大学基督教学会への委譲をお願いすることに致しました。

もちろん、著作権者の方々の中には、様々な事情により、公開をご承認しかねるという場合もあるかと存じます。その場合は、2021年12月末日までに、その旨を本学会事務局まで申し出て頂ければ、当該論考に関しましてはオンライン化を中止致します。上記の期日までにお申し出のなかった場合、ご承認頂いたものと見なして公開の手続きを進め頂きたく存じます。また、期日後に初めて本告知を見られて、公開を停止したい場合も、本学会事務局までご連絡頂けましたら、停止の手続きを進めさせていただきます。

以上

連絡先：

京都大学基督教学会事務局

〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学文学部内 キリスト教学
研究室気付

Scskyoto@gmail.com

JOURNAL
OF
CHRISTIAN STUDIES
KIRISUTOKYOGAKU KENKYU

Vol. 40

3, 2021

Contents

- Über die immanente Transzendenz in Kazuo Mutōs
Religionsphilosophie* KATAYANAGI Eiichi
- Über die "Neue Religionsphilosophie" von Kazuo Mutō*
..... MORI Tetsuro
- Kierkegaard in Mutō's Philosophy of Religion* TANIZUKA Iwao
- Über die spirituelle Anschauung Kazuo Mutōs* KANEKO Haruo
- Some Comments on the Understanding of Apocalyptic Eschatology by
Mutō Kazuo* KATSUMURA Hiroya
- Mutō Kazuo's Theology of Religions
— An Introduction* Martin Repp
- A Eulogy on the late Mr. Hayashi Tadayoshi*
..... KATAYANAGI Eiichi

THE SOCIETY OF CHRISTIAN STUDIES
KYOTO UNIVERSITY

Kyoto Japan